

# メロン

和宮龍太郎

自分だけは特別な何かを持っていると信じて今までやって来たのだけれど、それは幻想に過ぎなくて俺の中は空っぽだった。そこに何かを注いだとしても、グラスに水を注ぐように一杯になる、っていう感じにはならなくて、グラスの底のスポンジが全てを吸い取って何も残らないのだ。この海綿体め。こいつのせいで俺には何にも残らないのだ。どんなに美しいものにも関心がなくなり、わくわくすることもなくなってしまったのだ。

自分にはその海綿体の正体が分かっているつもりだけど、克服も共存もできずにいる。その黒く得体の知れない塊は、ずっと俺の心に沈んだままなのだ。

家にいて、そいつと向き合っていると食欲がなくなり、何をやってもむなしく感じるのだ。あー俺って繊細だから芸術家向きなんだよねって思ったりするけど、それって単なる自己満って感じで、そんな心の闇を持って何をどう表現するのも分からないし、それを誰かに伝えて何か意味あるの？

家の空気がだんだん重くなって、これ以上は耐えきれず、あーって叫びたくなって思わず外に出る。最寄りの駅まで歩いて、とりあえず三ノ宮・大阪方面の電車に乗って、三ノ宮駅で下車する。さてどうするか、と呆然としていると、構内で神戸市立博物館のポスターがふと目に入る。ボストン美術館所蔵の浮世絵の展示をやっているらしい。っていうか日本の浮世絵を何でボストン美術館がもってるんだよーっていうきつともう誰かがしたのであろうツツコミを入れて、とりあえず覗いてみることにする。まあ行く当てないし、絵でも見て自分の感性とか芸術的センスを磨くことにする。俺はこう見えても、イラストレーターで絵の造形は深いつもりなのだ。

三ノ宮駅から神戸市立博物館までは徒歩で十分くらい。京町筋を南へ行くとずっしりした古代ギリシャ風の建物が右手に見えてくる。昔、どこかの銀行の神戸支店だったから、そんなデザインらしいのだ。

神戸市立博物館の周りには、同じように重厚でモノトーンな建物が多く、海川から少し湿った空気が流れ込む。目を閉じて湿った空気と景色を肺一杯に吸い込んで、もう一回よく周囲の風景を眺めると、さっきまで青く見えた空でさえ、重々しい灰色になってしまう。三井住友銀行ビル前から聞こえて来るジャズミュージックがよりいっそうそういう気分させているのかもしれない。なんか鬱な気分がこのまま博物館に入っても、って思うけどここまで来たら乗りかかった船で、入場料を千四百円も払う。(想像がつくと思うけど俺は裕福ではない)

吹き抜けのホールからエレベーターで三階へ行き、鳥居清長、喜多川歌麿、東州齋写楽の順に浮世絵を鑑賞する。多くの人たちが熱心に見入っている。どこかつかみ所のない浮世絵に俺もどどんのめり込んで、深く味わう。視覚的に捉えるのではなく、空気のように『吸う』のだ。目を閉じて絵を一旦肺に入れた後に、絵を体中に巡らす。いつも心がける絵の鑑賞方法だ。俺にとってそれは、呼吸したり、髪の毛を洗ったり、ご飯を食べたりするのと同じくらい当たり前のことなのだ。特に気に入ったのは、鳥居清長の美人像だ。美人画であるのにも関わらず、その色彩と顔立ちが、みすぼらしく感じたのだ。優雅であり儂げ。淡く幽かでも圧倒的な存在感。その全く相容れないものが一つの絵の中に存在していて、しかも絶妙なバランス。少しでも色や線が違っていたら、この美人は瞬く間に崩壊してしまうだろう。俺はそんな風に鳥居清長の美人像に強く心が惹かれて、自分でそんな感覚になるのは本当に久しぶりでなんかハッピー。あっという間に、心は満たされてうれしい。一通り館内を見て、その気持ちそのままに外に出ると、博物館周辺のどんよりした風景はもう過ぎ去っていて、そこにあるのは、にぎやかで明るい旧居留地の町並みだけだ。さっきまでの湿った潮風は爽やかで、ジャズミュージックでさえ、俺様登場のBGMに早変わりなのだ。俺は幸福だけを持って、三宮センター街をぶらつくことを思いつき、博物館からフラワーロードまで出て、北上してセンター街を目指す。

三宮センター街は二階建てアーケードになっていて、初めて来た人は迷ってしまうほど構造が複雑だ。神戸マルイやGAP、マクドナルドなど若者向けの店舗だけではなく、高級文房具店や洋菓子店などの店舗もあるので、買い物客の年齢層は幅広く、平日、休日に関わらず大勢の買い物客で賑わう。だから俺はこれまで、うわーうぜーとか言って、センター街を避けてたけど、今日はこの人ごみでも平気だ。

センター街を三宮方面から元町方面へ歩いているとジュンク堂があって、そこの角を左へ曲がると、古い青果店がある。センター街は人通りが多く賑やかな通りだけど、その店先だけはなぜか暗い。俺にとっては行きつけで大好きな店だからすぐに分かるけど、あまりにもひっそりとしているものだから、多分たくさんの人がその存在を知っているわけではないだろう。店先には、急な勾配の黒い台の上に人工芝のマットが引かれ、そこに整然と新鮮な果物や野菜が並べられている。トマトの色は真っ赤な絵の具をパレットに絞り出したみたいだし、綺麗にラップされたバナナは、フィリピンの原生林から今ここに着いたよ、って感じだ。あっ、よだれが止まらねー。

りんごやなしが並べられている中に、発泡スチロールでできたネットに三分の二くらい包まれ、赤いリボンをかわいらしく装飾されたメロンが、仰々しくこっちを見ている。俺はメロンが好きだ。スイカほどはっきり主張しすぎない淡い色、そしてかさぶたのようにメロンの表面を覆う網目部分が何とも奥ゆかしい。あっ、このメロンなんだ。俺はこのメロンが欲しい。

ということで俺はそのメロンを高い値段にも関わらず購入する。桐の箱に丁寧に収まったメロンの重さを感じながら、センター街を闊歩する。自宅でジューシーなメロンを口一杯に頬張る姿を想像する。夕張の匂いがあたりに漂い始める。その匂いは俺の周りをすっぽりと囲んでしまって、もうすでにここは三宮ではない気分だ。そこで、俺はもう一度黒い塊と向き合う。これまで自分が歩んで来た道、そしてこれから…。俺は、夕張の広い平原で黒い塊の核心と出会うことができる。ずっとずっと先の未来で俺を待っていたのだ。あっ、ちょっと待って、俺ってあまりにも無防備で無力じゃん。そう感じた瞬間に自然に恐怖がずっと頭に入って来て体中をあっという間に支配してしまう。どうしよ。またスタートに戻っちゃうの？

はっと気付く。俺はまだセンター街をぶらついている。よかった。まだ俺はここにいる。

そのとき、ははは、と腹の底からこみ上げる笑いを堪え、思わずにやりとしてしまう。メロンではなく、メロンを包む発泡スチロールのネットを思い出す。こんなに人が行き交う、元町・三宮間のセンター街で、ネットを使ってみたら。俺にまた博物館を出た後の幸福感が戻って来る。それだけじゃない、俺は興奮している。そしてこんなアイデアを思いつく自分にある種の誇りさえ感じているのだ。

センター街の道の中央でしゃがみ込んで、桐の箱をそっと開ける。もちろん中には大好きなメロンがこっちを見えて、その周りには発泡スチロール製のネットが。お目当てはこのネットだ。俺はそのネットをメロンからはぎ取り、頭にかぶる。顔がネットで隠れる。そしてメロンに結びつけられていた赤いリボンをおしゃれ神戸ガールの真似をして、頭にカチューシャっぽく巻いてみる。自分の格好を熱心に想像してみる。今、俺の格好はどんなにおかしくて愉快なのだろうか。変にくすぐったい気分になって、より一層微笑んでしまう。やばいやばい、堪えろ、俺。平常心平常心。

薬局を通り過ぎて、横断歩道を渡る。そして左手のBALのガラスに映る奇妙なものが目に入る。

腹が振れて腸が飛び出て、もう元には戻らないんじゃないかと思う位、笑う。声に出して笑う。

そうして俺は前を向いて元町方面へと歩いて行く。